

1. 麦類の生育状況と今後の管理について

播種以降、気温が高く推移したため、平年に比べ生育は早まりました。ビール麦の出穂のピークは、4月5～6日と平年より1週間程度早く、小麦も同じく1週間程度早まりました。低温による幼穂凍死は4月上旬時点で見られませんでした。

今後の気温も平年並みまたは高い予報のため生育が早まると予想されます。

明渠の点検・補修、赤かび病の防除、収穫作業を適正に行い、高品質麦の生産に努めましょう。

(1) ビール大麦

発芽勢の確保のため、適正な収穫作業を行いましょう。

◎ 早刈り厳禁

収穫適期：8割の穂首が90度以上曲がった頃（穀粒水分25%以下）

生育ムラがある場合：収穫日を通常の生育よりも1～3日遅らせるか、刈り分けを行いましょう。

◎ 適正な収穫作業

コンバインの掃除を徹底的に行いましょう。回転数は稲よりも1割遅くし、裂皮や剥皮が発生しないか確認しながら作業しましょう。

(2) 小麦

圃場を観察し、防除適期を逃さないようにしましょう。

◎ 赤かび病の追加防除（2回目）

1回目散布（開花始）の20日後に2回目の薬剤散布を行いましょう。

同系統薬剤の連用は避け、収穫前日数に注意して薬剤を選びましょう。

2. 水稻の育苗ポイント

(1) 適切な浸種・催芽

浸種時間の目安

・浸種は積算温度100～120℃
(消毒種子は120～130℃)程度で行ってください。

・低温備蓄種子はしっかり吸水させるため、浸種時間を1～2日長くする。

・催芽は、28～30℃、18～20時間 ハト胸程度に均一にするようにする。

種子	水温13℃の場合の浸漬日数 (積算温度)
未消毒種子	8～9日(100～120℃)
消毒種子	9～10日(120～130℃)
低温備蓄種子	9～12日(120～150℃)

(2) 適正播種量

播種は薄播き（箱当たり催芽粃130g）で、がっちりとした苗を作りましょう。

(3) 播種後の管理

徒長やムレ苗発生防止のため温度管理や、過剰なかん水に注意しましょう。

		展開後1～4日(緑化期)	5～15日	15日～
温度管理	日中	18～25℃(30℃以上にしない)		
	夜間	10℃(最低5℃以上)		5℃～7℃以上
かん水	かん水量	2日に1回 極度に乾燥した時以外は控える。	1～2日に1回 控え目のかん水に努める。	1日1回午前中十分に
	注意事項	<ul style="list-style-type: none"> かん水量が多すぎると苗が徒長し、根の生育不良を招く。 低温時のかん水は午前中に行い、夕方のかん水は行わない。 夕方、苗箱の表面が乾く程度が最適です。 		晴れの日にはタップリと、曇りの日は控えめに。

(裏面あり)



3. とちぎの星の施肥について

とちぎの星の稈（わら）は長めで稈の剛柔は中であり、あさひの夢より倒伏し易いため、多肥栽培は行わずに品質向上のため以下の点に注意しましょう。

施肥体系	基肥	施肥量	追肥	施肥量
1 発	とちぎの星専用 ひとふりくん	35～40kg/10a	—	—
分施	オール 14	20～25kg/10a	BB NK-202（一発穂肥） BB NK-707	10～15kg/10a
	BB-F284			

※側条施肥を行う場合、更に 2 割程度ずつ施肥量を減らしましょう。

（その他注意事項）

- ① 栽植密度を **60～70 株/坪** で維持し、収量・品質を確保します。
→坪あたり株数（栽植密度）を下げると、品質低下の原因になります。
- ② 移植時のかきとり量を **1 株あたり 4 本程度** の植付けになるよう調整します。
→株あたりの本数が多い苗の植付けは、箱数が増える上に、軟弱茎を増加させてしまいます。

4. 稲こうじ病の防除について

イネ稲こうじ病は籾に暗緑色の病粒を形成する病害で、この菌による被害粒の混入が確認されると農産物検査で規格外になってしまいます。原因菌は土壌で越冬するため、以前発生した圃場では防除を行いましょ。また、多肥栽培で発生が助長されるので、適正施肥を行いましょ。

① 移植期の防除薬剤（ともにシメコナゾールを含む）

農薬名	使用量	使用時期	使用回数
トリプルキック箱粒剤	育苗箱（30×60×3cm、使用土壌約 5 畝） 1 箱当り 50 g	移植 3 日前～ 移植当日	1 回
モンガリット粒剤	3～4kg/10a	収穫45日前まで	2 回以内

※シメコナゾールを含む農薬の総使用回数は 2 回以内（移植前は 1 回以内）であることに注意。
※トリプルキック箱粒剤はウンカ類に登録がないので、別途イネ縞葉枯れ病対策を検討する。
※モンガリット粒剤を移植期に使用する場合、移植直後～10 日が処理適期である。

② 出穂期前の防除薬剤

農薬名	希釈倍数、使用量	使用時期	使用回数
ドイツボルドー A	2000 倍、 60～150 畝/10a	出穂 10 日前まで	—
モンガリット粒剤	3～4kg/10a	収穫 45 日前まで	2 回以内

※適期を逃すと効果が著しく落ちるため、ドイツボルドー A（銅剤）は出穂 20～10 日前、モンガリット粒剤（シメコナゾール剤）は出穂 21～14 日前に散布する（幼穂が 1～5cm になっていることを確認して散布）。

※シメコナゾールを含む農薬の総使用回数は 2 回以内（移植前は 1 回以内）なので、移植期に防除した場合回数に注意する。

※出穂期のいもち病防除と同時に防除できないため注意。